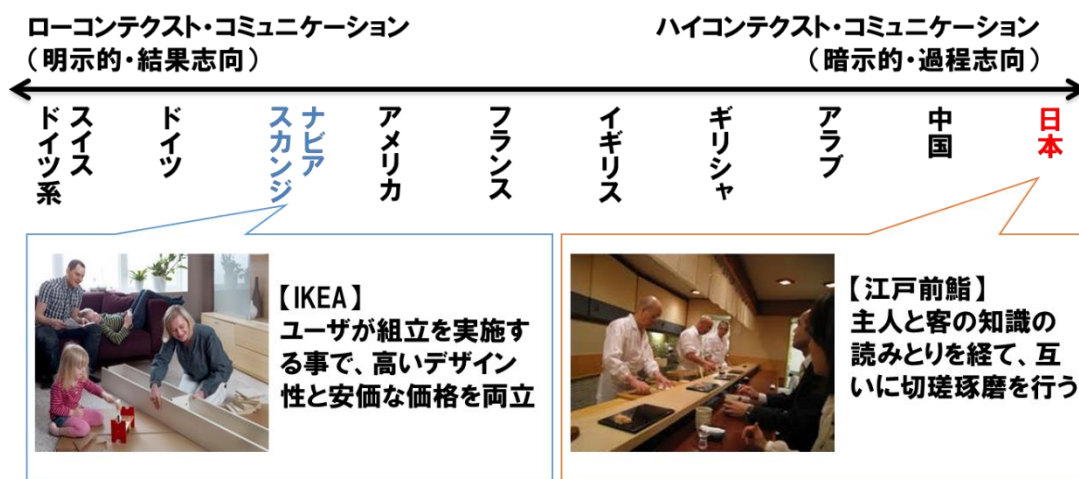


## ハイコンテキスト社会としての日本

小林 潔司

エドワード・ホール(Edward T. Hall 1914-2009)は、「文化を超えて」(1976)<sup>1)</sup>の中で世界の文化をローコンテキスト型とハイコンテキスト型とに分類した。

彼は、日本文化を最もハイコンテキスト型と位置づけるとともに、その対極としてドイツ系スイス社会をもっともローコンテキスト型社会として位置づけた。図の横軸が厳密な尺度を表しているわけではなく、せいぜい順序関係を表しているのみとみてほしい。1976 年に出版された本なので、多くのアジアの国々がとりあげられていないという問題がある。この中で、ドイツ、スカンジナビア諸国、アメリカ合衆国などローコンテキスト型文化として分類された国々では、コンテンツが重要な意味を持っており、言葉として表現してはじめてコミュニケーションが可能になる。一方、日本のようにハイコンテキスト型文化の国々では、非言語的表現を用いたコミュニケーションが実施されている。



出典(上図):エドワード・ホール“Beyond Culture”(1976)

中国をはじめとするアジアのほとんどの国々やアラブ諸国はハイコンテキスト型文化であり、日本と同様に非コンテキスト型コミュニケーションが重要な役割を果たしている。しかし、これらの国々における非言語型コミュニケーションの様式は、それぞれまったく異なっている。日本流のコンテキスト型コミュニケーションは、ほとんど通用しないと考えていい。

コンテキストとは、日本語で「文脈」、「背景」、「脈絡」などと訳されるが、人々がコミュニケーションを行うときに、暗黙のうちに全員が了解しているような事項を意味する。コンテキストには家族だけが共有しているものもあれば、学校や会社などの組織のメンバーだけが共有していたり、国や社会(民族)が共有しているものもある。どのような社会でも多かれ少なかれコンテキストに依存しているが、国や社会によって、その依存度は大きく異なる。

多民族社会で多くの文化や価値観が共存しているような社会では、すべての国民が共有しているような事項はそれほど多くない。そのため、ローコンテキスト型社会では、仕事をするにしても、日本では考えられないほど多くのことを言葉を用いて明示的に表現し、互いに契約書を交わして合意しないと始められない。これに対して日本人は、長い歴史の中で形作られてきた共通の文化や言語を持ち、あえて言葉に出さなくてもお互いがわかり合える。日本人同士が同じような価値観や習慣、常識を共有しているので、あえて契約書を取り交わさなくても「同じ釜の飯を食べた仲」といった人間関係の下で仕事をはじめられることがある。コンテキストの高低はどちらが良いというものではない。言語的な表現がコミュニケーションのベースなのか、非言語的なコンテキストがコミュニケーションのベースなのかの違いと考えれば良い。

日本型のコンテキストは、日本の伝統文化や芸術、文化のすみずみにいきわたっている。例えば、「新古今和歌集」にある有名な藤原定家の歌「見渡せば 花も紅葉も なかりけり 浦のたまやの 秋の夕ぐれ」をとりあげよう。日本人には、花と言えば桜。桜と聞くと、花見の光景、紅葉と言えば、秋の紅葉狩りなど様々な光景を思い浮かべることができる。この和歌の直接的なコンテンツは、「見渡しても花も紅葉もなく、質素な苔屋（小屋）が浜辺に建つだけの晩秋の寂しい夕暮れ」というメッセージだけである。しかし、日本人は、この短いメッセージから、さまざまな物語を読み取ることができる。作者は、かつては京の都で多くの部下や同僚、縁故者に囲まれ優雅な生活を送っていたのだろう。ところが、とある事件で失墜し、都を離れて人里はなれた土地で一人で暮らす境遇に至った。短いメッセージの中に、このような多くの物語が暗に語られている。日本人はこのような物語を理解できるようなコンテキストの中で生活している。また、藤原定家は、自分自身と読者がコンテキストを共有していることを前提として、このような和歌を作成した。しかし、ローコンテキスト型文化の中で成長し、生活を送っている人々には、このようなハイコンテキストなコミュニケーションを理解することは不可能である。

日本はハイコンテキスト型社会であるがゆえに、外国人には理解できない陥穽に陥る危険性がある。日本人が話す英語は On stage English と呼ばれることがある。これは、日本人の発想方法が理解できないため、日本人の話す英語が理解できないためである。日本人は時として話し相手に、同じステージに乗ることを要求することがある。例えば、自分が同窓会に出席したけれど、会いたいと思っていた親友が出席しておらず、がっかりした場合を想定しよう。ところが、その翌日に、その同級生とばったり出会ったとしたら、どう相手に話しかけるか？ほとんどの日本人は、「昨日、同窓会があったんですよ」、さらには「どうして来なかったの」と言ってしまう。すなわち、自分と相手の間に同窓生であるというステージを作り上げ、自分と相手と同じステージの上に立っていることを前提にコミュニケーションを行うのである。日本人は相手が外国人であっても、とりわけ相手と親しくなればなるほど、相手に対して、ステージを共有していることを前提としたコミュニケーションを行ってしまう。このように英語という極めてローコンテキスト型の言語を用いたコミュニケーシ

ョンの中に、日本的なコンテクストを持ち込んでしまう。そうすると、外国人は日本人が話す英語を理解することが難しくなる。このような背景から、日本人の話す英語が On stage English と呼ばれるようになった。

多くの日本人は、知らず知らずのうちに、さまざまな場面で相手との間に共通のステージを築こうとする。日本人のアイデンティティは、例えば「同期」、「同窓」、「同郷」など、相手との共通のラベルを相互承認することにより形成される場合が多い。例えば、初めて出会った相手であっても、同じふるさとの出身であることが判明したとたんに、気を許すことがある。共有するラベルが多くなればなるほど、相手との親近度は高くなる。このような親近性は一方向ではなく、双方向的である。お互いが同じラベルをもっており、それを親近性の源泉だと相互に認め合う。すなわち、アイデンティティの相互承認が行われるのである。アマルティア・センが、「アイデンティティと暴力」(2007)<sup>2)</sup>の中で言うように、異なる宗教や民族で構成される多民族国家では、敵対する勢力に対応するための手段としてアイデンティティが形成されることが多い。人々がこのような敵対的アイデンティティでつながるとき、グループ内の結束力は極めて強靱である。これに対して、日本のように相互承認の結果として形成されるアイデンティティは緩やかつながりであり、ステージを共有することがモラルやルールによって強制されるわけではない。自然にステージが形成され、それを前提に自然にコミュニケーションが始まることになる。その背景には、日本人をとりまく数多くの社会的・文化的コンテクストが、そのようなステージの形成を支えているのである。しかし、外国人にとっては、ラベルがアイデンティティの源泉となっていないわけではなく、同一のステージに乗っていることを前提としてコミュニケーションが行われると当惑してしまう。特に、日本企業の海外現地法人で発生する多くのトラブルが、同一のステージを無意識のうちに相手に強制するところから始まるものが少なくない。さらに悪い場合は、自分がステージの上に乗っていることに気づかないため、いつまでたっても相手とコミュニケーションができない羽目になる。

同じステージに乗ることを要求するのが日本の文化であり、日本人がこの世界から解放されることはきわめて難しい。日本人がオンステージ的発想をすることは止むを得ないが、相手とのコミュニケーションが不全となった時に、オンステージ的発想に陥っていないかを客観的立場から考える視点が求められる。一方で、オンステージ的発想は、アジア諸国で活動する上でメリットにもなり得る。逆に言えば、そういうステージをつくる、あるいはステージの上で振る舞う技術を日本人は持っている。アジア諸国は多かれ少なかれ、コンテクストに彩られた社会である。日本人が相手国のコンテクストを理解することは極めて難しい。しかし、相手国社会にある文化的コンテクストを尊重し、コンテクストを理解しようと努めることは可能であり、極めて重要なことである。研究であれビジネスであれ、相手と共通の目的とミッションを明確にし、それを達成するための共通のステージを一緒に築く努力を辛抱強く継続させることは可能であろう。日本型ステージを無批判に持ち込むことはご法度である。

参考文献

- 1) Edward T Hall: Beyond Culture, Garden City, N.Y. : Anchor Press, 1976. エドワード・T・ホール, 岩田慶治・谷泰共訳: 文化を超えて、阪急コミュニケーションズ、1993.
- 2) Amartya Sen: Identity and Violence: The Illusion of Destiny, W.W.Norton & Company, 2007. アマルティア・セン、大門毅編集、東郷えりか訳: アイデンティティと暴力: 運命は幻想である、勁草書房、2011